

書 評

櫻田智恵、『タイ王国を支えた人々—
プーミポン国王の行幸と映画を巡る奮闘
記』（ブックレット《アジアを学ぼう》
45）風響社、2017年、66p.

藤田 渡*

平成の御世が終わろうとしている。ひとつの区切りとして、新しい時代に漠然とした希望、あるいは、不安を抱く人も多いのではないか。天皇は政治に関与しない「象徴」とする日本ですら、ひとつの国の社会全体がひとりの人間の生物学的な状態に左右される。君主制と国民国家の奇妙な共生である。タイでは、一足先に代替わりを果たした。先代のプーミポン国王の政治的影響力は絶大だった。崩御の瞬間に泣き崩れたタイ人の姿は印象的だった。本書は、そうしたプーミポン国王の権威が創り出される最初の段階、今風にいえばスタートアップを描いたものである。

具体的には、プーミポン国王の地方行幸が始まり、国王に関する映画が製作・上映された時代に、現場の担当者たちが苦勞しながらそれを実現していった舞台裏を、行幸の公的な記録や関係者の回顧録などから具体的なエピソードを丹念に拾い描く。ブックレットシリーズの1冊として、一般の読者にわかりやすく書くことや60ページ程度という紙幅の限りのなかで、学術的にも読み応えのある内容となっている。

まず、「はじめに」と、1章「プーミポン国王とは」で、タイや王室に関する基礎知識と、1950年代から60年代初めという本書で取り扱う時代の位置づけを確認する。反王制的だった人民党政権から、王室の権威を政治的に利用するサリット政権に移した転換の時代に、国王は、戦略的に自らの活動の余地と政治的プレゼンスの拡大を図ってきた。それが、その後の「開発の王」としての絶大な威信の礎となったことを強調する。

続く2章「美しき奉迎風景—その誕生」、第3章「美しき奉迎風景—その展開」では、初めての行幸が行なわれた経緯を紹介する。ビルマからの招待を、国内の各地域の訪問もできていないのに外国には行けない、という理由で断るなど、国王が行幸をかねてから望んでいたこと（pp. 13-14）、それが端緒となり行幸が計画され、中部、東北部、北部、という順で実行されたこと（pp. 15-31）などが紹介される。さまざまなドタバタがフィードバックされ、様式化・マニュアル化が進んでいった（pp. 31-33）。いまや「伝統」と思えるほどに様式化された国王の奉迎に関する所作は、実は、この時期の試行錯誤のなかで創られてきたものだったのだ。

第4章「美しい奉迎風景の美しくない舞台裏」では、本書の真骨頂(?)ともいえる、舞台裏で大変な苦勞をした人たちのエピソードがふんだんに紹介される。2日間、全く休みなく、水浴びもできずに働き通した警察官（pp. 36-37）や、心労で亡くなった県知事（p. 40）などが特に印象的だ。実は、タイでも、こういう少数の有能な人材が

* 大阪府立大学人間社会システム科学研究科

ワーカホリックに働き、国家や社会を支えているのだろうか？それとも、国王の行幸という前代未聞の事態は、普段はそこまで勤勉でないタイの公務員を極限まで追い込んだのだろうか？興味は尽きない。

第5章「陛下の映画がやってくる」では、行幸だけではカバーしきれない全国津々浦々の国民に国王の存在を印象づけるために、映画が製作・上映された経緯を紹介する。ケーオクワンという、国王に見いだされ、専属のカメラマンとなり、後に、国王の宣伝部長といってもよい役割を担った人物の回想が柱となっている。国王がすべてを教えてくれた(p. 44)。国王の指導に忠実に従いお仕えすることを喜びとした(pp. 47-49)。こういう、愛すべき愚直さをもったケーオクワンの姿が、回想録からの引用を交え浮き彫りにされている。

プーミボン国王は自らの戦略を100%実現するため、こうした人々を文字どおり、手足として用いた。国王崩御の瞬間の我を忘れたかのようなタイの人々の姿は、その戦略が恐ろしいほどの成功を収めた証だろう。

「おわりに」では、プーミボン国王を「国王」にしたのは、こういう側近や役人たちだ(p. 57)、と再び強調し、さて、跡を継いだ新国王が、そういう忠良を得られるだろうか？—これが最初の課題だろう(p. 58)、と締めくくる。

実は、2018年7月の日本タイ学会研究大会で、本書の書評セッションが設けられた(私が評者を務めた)。著者の櫻田さんは、当日、豪雨災害の影響で来場できなかったが、

事前に評者がお送りした書評に対する著者からの応答を寄せてくださった。フロアからも、含蓄のあるコメントが寄せられた。以下、それらも含めて、本書の意義を考えてみたい。

まず、評者は、本書が描く草創期の行幸や映画制作の様子は、次の2点について考えるヒントになるのではないかと考えた。それは、1) 近代国家建設の文脈でこの時代をどうみるのか、2) 地方の人々の王権観、である。

1) 近代国家建設とこの時代：本書で描かれた行幸の顛末、特に、地方の人々や役人の動きからは、近代国家建設途上の「夜明け前」という印象を評者は受けた。興奮した群衆が国王の車列に群がる(p. 19)、道端の花、着用する腰布の切れ端、隣人からのお裾分けを献上する(p. 28)など、人々の行動は現代では考えられない素朴なものだった。役所では、道路などインフラ整備の予算が不足し知事がポケットマネーで賄い、ガソリン代が足りず役人が個人負担をしたという(p. 35)。近代的な法や組織による統治ではなく、個人の資質・資産に依存した「人治」の色合いが強く残っていたといえよう。水谷[2005]は、この時代の地方の警察について、法や組織・職責ではなく個人の資質に依存した治安維持が行なわれていたことを「近代警察の蹉跎」と呼んだが、本書が描く地方行政の様子は、それに通じるものがある。

著者からの応答のなかでは、こうした個人負担は、現代のタイでもあるとの補足があった。学会のセッションでは、フロアから、実は、日本でも天皇の行幸では地元の首長や民

間がポケットマネーを使っている。だから「タイは前近代的だ」というのは間違いだ、という指摘があった。君主の象徴権力を考えるうえで興味深い話である。ただし、インフラ整備の予算を（タイでは）政治家ではない官僚の知事が個人的に負担するなど、日本では無理だろう。近代的官僚制の透徹という点で、やはり日本とは相当な程度の違いを感じざるをえない。

また、評者は、この時代以降、行幸や映画による人々の国王の体験は、「想像の共同体」[アンダーソン 2007] の手がかりとして機能した可能性を指摘したが、著者からは、同様の視座での研究が、すでに日本の行幸については行なわれてきているのにタイについてはないことが不思議だった、という応答があった。本書で、タイについてもそうした視座を切り開くことができたことは評価されるべきだろう。

2) 地方の人々の王権観：一般に、プーミポン国王が人々から篤く敬われるのは、国民を支援してきたからだと思われる。少なくとも評者がタイで接してきた人たちはみなそう言っていた。しかし、実は、それも長年の間に構築されてきたものだった。初期の行幸では、奉迎する人々による国王への直訴は禁止された (p. 25) ように、民衆に実利的な恩恵を与えることは企図されていなかった。それにもかかわらず、人々は熱狂的に出迎えた。1950年代の人類学者の記述によれば、農民の家庭でアメリカのアイゼンハワー大統領の写真が飾られていた (p. 29) という。本書の舞台となった1950年代から1960

年代初めには、タンバイア [Tambiah 1976] がいうような仏教の護持者としての国王の神聖な力への畏敬が基礎にあり、また、「マンダラ国家」[Wolters 1999] のような多元的な力の配置が、地方の政治空間に相当程度、残存していたのだろう。開発、反共、といったなかで、国王の象徴的な重みは次第に並列する他のアイコンを圧倒し、一元的に塗りつぶしていったのではないだろうか。著者の応答では、サリットの死後、開発独裁により民衆を助ける「ポー・クン」（父親としての支配者）という意味）の側面を国王が吸収し、「完全な」国王になったのではないかと考えているということだった。

このように、本書は現代タイ政治の扇の要を描き、タイ政治研究にさまざまなインプリケーションを与えるものである。もちろん、ブックレットの制約から書き切れなかったこと、学会のセッションでフロアからのコメントで指摘された、ケーオクワン分析が、自身の回顧録のみに依拠しているという偏りなど、課題はある。そのうえで、これも、学会のセッションでフロアからのコメントだが、現にその国の人々にとって複雑な思いがある国王や王制について、表も裏もあるディスコースのバランスをとって語るのは難しい。本書は、そういう難しいテーマに取り組み、各国の王制研究に広がる可能性を切り開いた。今後も、著者には、国民国家において国王を敬う人々の心のひだに迫る研究を期待したい。

引用文献

Tambiah, S. J. 1976. *World Conqueror and World*

Renounce: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background.
Cambridge: Cambridge University Press.

Wolters, O. W. 1999. *History, Culture and Region in Southeast Asian Perspectives*. Ithaca: Cornell University. (Revised Edition.)

アンダーソン, ベネディクト. 2007. 『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳, 書籍工房早山.

水谷康弘. 2005. 「タイ近代国家の蹉跌—人民党政権による警察改革の試みをめぐって」『東南アジア研究』43(2): 191-209.

堀江未央. 『娘たちのいない村—ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』京都大学学術出版会, 2018年, 354 p.

綾部真雄*

本書は、中国雲南省ラフ女性の遠隔地への婚出をめぐる良質なエスノグラフィである。地に足のついた、そして良心的な調査を実施してきたことが文章の端々からうかがえる。見てきたもの、聞いてきたことを文字に起こす前に、一度立ち止まって、違う角度から光をあて直す作業にも手間を惜しんでいない。先行研究における自論の布置の仕方にも工夫がある。通常、女性のマイグレーションをめぐる議論は、移住先での女性の生き方に焦点を当てることが多い。それに対して筆者は、あえて「送り出し側」、すなわち女性たちの出身村落に身を置き、そこで生じている「若い女性の不在」が、人々の意識と語りにもたらすかを緻密に描き出すことを試みてい

る。新鮮な手法である。また、遠隔地に嫁いだ女性たちのもとを訪れての聞き取りにも一定期間従事しており、結果として本書にマルチサイテッド・エスノグラフィとしての側面をもたせてもいる。

近年の人類学は、一次資料を後景化させ、思弁的な議論により比重を置くようになった感がある。「フィールド」とされてきたものの端っこが世界に溶けこみ、境界がみえにくくなるなかでの必然的な変化ではあるが、依拠しうるスタンダードの不在に、そこはかたない不安を抱えている人類学者も少なくない。そうしたなか本書は、ふんだんな一次資料を用いながらも、平板なファクトの羅列には終始せず、そこに巧みに最新の学術的課題や視点を織り込む姿勢をみせている。後述するように、理論面で若干の課題を残すようには見受けられるものの、今日的なエスノグラフィの書き方のひとつの範がここにあるといつてよい。

ここでいったん、本書の内容を概観する。

本書が対象とするのは、中国西南部に位置する雲南省の少数民族であるラフの村落における「若い女性の不在」と、その事実をめぐる村民らの語りである。現在、ラフの若い女性の多くは山東省、浙江省、江蘇省といった遠隔地に婚出しており、山間部の村落では非常にいびつな人口構成が生じている。通常のエスノグラフィであれば、婚出先の女性に焦点を当て、彼女たちの行動原理や価値の変化を追うところであるが、著者はあえて女性らの出身村でフィールドワークを実施し、空洞化した村を生きる人々の言葉の端々から、実

* 首都大学東京人文科学研究科